

令和7年

11月の重要農作業

四国中央市農業振興センター

《問い合わせ先》

四国中央農業指導班

（畜産）東予家畜保健衛生所

TEL 23-2394

TEL (0897) 57-9122

【天気予報及び概況】

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

	平均気温 (℃)	最高気温 (℃)	最低気温 (℃)	降水量 (mm)
2024 年	13.6	17.9	9.8	94.5
2023 年	13.5	17.7	9.3	53.5
2022 年	14.5	18.9	10.9	96.5
1991～2020 年	13.2	17.0	9.5	69.5

※気温については、1ヵ月の平均値（気象庁）

【作物】

1 小麦・裸麦

(1) 土壌改良剤

播種前に苦土石灰 80～150kg/10a を施用してください。

(2) 施肥

基肥は、化成 444 をドリル播栽培で 40～50kg/10a、全面全層播栽培で 50～60kg/10a 施用してください。

(3) 適期播種

播種適期は 11 月中旬ですが、降雨等で土壌水分が高い場合には湿害（発芽・出芽不良）を招くので、気象予報を参考に計画的に作業を進めてください。播種量は、ドリル播栽培で 7kg/10a（目標苗立率 150 本/㎡）、全面全層播栽培で 13kg/10a（目標苗立率 200 本/㎡）程度です。

なお、播種が遅れる場合は播種量を増量してください。

(4) 湿害対策

播種作業時または作業後に、圃場の周囲及び 3～5 m 間隔に排水溝を設置し、雨水が排水できるようにしてください。

また、排水溝は必ず圃場の外まで導いて、水が停滞しないようにしてください。

(5) 除草剤の散布

播種直後（雑草発生前）にクリアターン乳剤 500～700ml/10a または播種後から麦 3 葉期（雑草発生前からイネ科雑草 1 葉期まで）にリベレーターフロアブル（60～80ml/10a）を水 100ℓ に希釈し、均一にムラなく散布してください。

2 水田の土づくり（収量・品質向上対策）

急激な環境変化（長雨・干ばつなど）に強く品質の良い米づくりを行うためには、土壌条件を良好な状態に保つ「土づくり」が重要です。

(1) 有機物の施用

完熟堆肥が望ましく、施用量は目安としてオガクズ堆肥（牛ふん 1,500kg/10 a、豚ふん 1,000kg/10 a）、乾燥鶏ふん 100kg/10 a です。

また、稲わらは年内に全量還元してください。

(2) 土壌改良資材の施用

有機物（堆肥・稲わら）と同時に鉄強化美土里 60kg/10a を施用することで地力向上が図られます。

(3) 深耕について

根の分布拡大を図るため、作土深 15cm を目標に深耕してください。

<松本>

【野菜】

1 さといも・やまのいも栽培予定地のバスアミド微粒剤による土壌消毒

さといも、やまのいもを長年栽培した圃場では、次の土壌病害や雑草の発生が多く見られます。

○ さといも：乾腐病、ネグサレセンチュウ、一年生雑草など

○ やまのいも：根腐病、褐色腐敗病、一年生雑草など

病原菌は被害残渣とともに土中に長く残り、4～5 年後に作付けしても発病することがあります。

【対策のポイント】耕種の防除とバスアミド微粒剤の散布を実施

1 水稻を 3～4 年以上栽培し、長期の輪作とする。

2 種いもは、無病畑から収穫した健全な芋を使用する。

3 種いもは、消毒を必ずおこなう。

4 土壌消毒剤「バスアミド微粒剤」を使用する。

使用時の注意点 ① 適切な土壌水分量の確保 圃場の耕運・整地

② 使用量 20～30kg/10a ③ 散布方法 専用の散布機（バスサンパー）利用

④ 均一な土壌混和（ロータリー耕）⑤ 放置（約 2 か月）➡ ガス抜き（耕運）

ヨウトウムシ類の発生が多かったほ場では、収穫終了後、早期に耕耘等の後片づけを行ってください。

<徳永>

2 やまのいもの生産振興

やまのいもは、販売単価が安定していることに加え、マルチ栽培など省力化も進んでおります。また、栽培開始時に必要な種芋及び支柱の購入費用にかかる助成制度（1/2 以内）もありますので、栽培に関心のある方は、JA うま富農指導販売課 奥原、または、農業指導班 三谷まで連絡してください。

<三谷>

3 タマネギ

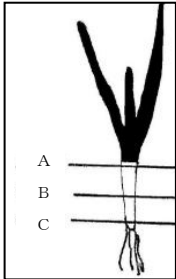
晩生品種「もみじ 3 号」は、11 月下旬に株間 10～12cm、条間 20～25 cm で植え付けます。苗は鉛筆以下の太さ（5～6mm）の苗を用います。

植付けは、根が地表に出ないように注意し、植付けの深さは 2～3cm（右図の B の深さ）程度で土に埋めるようにします。深植えしすぎると翌春の生育が悪くなることがあります。

定植後は、活着を促進するために灌水し土壌を十分に湿らせてください。

抽台を起こす原因は、①大苗を植えた場合や定植後の高温による過剰生育、②冬場の窒素不足（施肥が遅れたり、肥料が少なかったり、乾燥や除草剤で根傷み等を起こし植物に吸収されなかった場合）等が考えられますので注意しましょう。

<徳永>



【果 樹】

1 温州みかん

(1) 腐敗防止対策

腐敗果の発生を防止するために、収穫前の腐敗防止剤（トップジンM水和剤 2,000 倍（収穫前日まで））の散布を徹底してください。

収穫は、果実品質のバラツキを避けるために着色が早い樹冠外周、上部から分割採収し、果実を丁寧に扱って、腐敗果の発生・混入を防いでください。

(2) 樹勢回復

樹勢を回復させ、翌春の花芽・新梢の形成を促すために、早生温州は 10 月下旬頃、普通温州は 11 月上旬頃までに秋肥を施肥します。樹勢が衰弱している場合は、収穫後に液肥葉面散布を積極的に行ってください。

また、降雨がなく土壌が乾燥する場合は、灌水を行います。

(3) 次年産の着花過多対策

本年産の着果が少なく、夏秋梢が多く発生した樹は、次年産の着花過多を防ぐために、夏秋梢の整理を行います。側枝上の強い直立枝や内向枝は基部から除去します。外周部の夏秋梢は立ち枝を間引き、横枝を 1 本だけ残して結果母枝とします。樹全体の日照条件を考慮して、夏秋梢は 50～60% 程度残します。

2 中晩柑類

(1) 甘平、愛媛果試第 28 号（紅まどんな）

甘平は、収穫期までに土壌の乾燥が進む場合は、少量灌水を行います。

果実への袋掛けやサンテ被覆は、8 分着色以降に行ってください（時期が早すぎると、果梗部周辺を中心に着色が阻害されることがあります）。

愛媛果試第 28 号（紅まどんな）は、果皮障害の発生に注意する時期です。

屋根掛け栽培や樹体被覆では、夜露や降雨によって果皮が濡れている時に果実の周辺が高温になると、果皮障害の発生が助長されます。果実表面を濡らさない（早く乾かす）、また、高温にならないように工夫してください。

(2) その他

中晩柑類の秋肥の施用は、11 月上旬頃までに実施してください。

袋掛け等が必要な品種（せとか、不知火等）は、8 分着色頃に袋掛けを実施します（時期が早すぎると、着色不良や品質低下を招く恐れがあります）。

収穫期までは、土壌の乾燥が進む場合は、適宜、灌水を行ってください。

<三谷>

【花き・花木】

1 ラナンキュラス（球根養成栽培）

本圃の土壌消毒

白絹病の発生が見られる圃場では、必ず土壌消毒を行います。気温が 15℃ 以下になると処理時間が長くなるので、早めに行います。

バスアミド微粒剤 20～30kg/10a を均一に散布して土壌と混和し、散水してビニール被覆します。20 日後程度でガス抜きを行ってください。

2 アネモネ（球根養成栽培）

発芽後の除草

発芽後は、アネモネの芽、根を傷めないようにピンセット等で丁寧に除草してください。

3 シキミ

実生（種子）繁殖

10 月上旬中に採種した小葉優良系統の成熟種子を、10 月下旬～11 月上旬に播種します。事前に窒素・燐酸・加里各 1kg/a 施用し、床幅 1m、通路 30cm くらいに畝立てした播種床に 1㎡当たり 600 粒を 2～3cm 間隔で播種し、細土を 1cm の厚さに覆土します。

出芽後、敷草をするとともに寒冷紗により 50% 程度の遮光を行い、乾燥と鳥害に注意して管理します。翌年 3 月下旬に掘り上げて移植してください。

<佐津間>

【畜 産】

1 家畜の防寒対策

例年 11 月中旬より最低気温が 10℃ を下回るようになり、寒さに弱い幼畜は風邪等にかかりやすくなります。巻き取りカーテンの活用、屋根の断熱材は、防寒対策としても有効です。一方で、温度管理のため畜舎を密閉すると、アンモニア等が溜まり呼吸器障害の原因となることがあります。外気が直接幼畜にあたらないよう空気の流入に注意しながら換気を行いましゅう。気温のあがる日中に、ゆっくり換気を行うことも有効です。また、見落としがちなのが湿度です。子豚では湿度 65～75% が適正範囲とされています。温湿度計で客観的に把握し、湿度が低い場合は細霧や通路への散水が有効です。

2 鳥インフルエンザが発生しやすい時期になりました。

渡り鳥の飛来シーズンになり、鳥インフルエンザの発生リスクが高くなることから、発生予防対策を徹底しましょう。

<農場における発生予防対策のポイント>

① 入出時対策：消毒 更衣前後における交差のない動線、明確な境界線の確保。

② 野生動物対策：農場内の整理・整頓、堆肥舎や鶏糞搬出口への覆いやネットの設置。

③ 入気口対策：粉じん、羽毛等の取込み対策にフィルター設置。

特に消毒薬は有機物の混入により消毒効果が低下することが報告されています。消毒槽を漫然と通過するのではなく、事前にブラシで靴底の有機物をしっかり落とし消毒槽を通過する、こまめな消毒液の交換等、ついつい緩みがちになる手順をもう一度見直してみましょう。

<織田>